The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	江戸時代の茶道および香道に見られる花結びに用いられた花卉モチーフについての検討
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 38-39
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92368
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

江戸時代の茶道および香道に見られる花結びに用いられた花卉モチーフについての検討

矢島　由佳　大阪大学大学院在学

はじめに

主に草花をあしらった結びは長緒結びや花結びと称され，香道だけでなく，茶道でも用いられる。その華やかな見た目から，多くの人を魅了し続ける一方，その研究は十分になされていない。図絵としての花結びの記録は江戸時代中期以降にしか見られず，その多くは，茶道および香道で用いられたものである。本研究は，袋に結ばれた花結びを考察対象とし，これまで断片的に論じられてきた茶道および香道で袋に結ばれる結びとしての花結びの歴史的事実を再検討し，その文化的発展を体系的に明らかにすることを目指す。

花結びについて，江戸後期に旗本伊勢貞丈が子孫の為に書いた有職故実である『貞丈雑記』では，「女の芸の内に『絵かき・花むすび』と云う事あり。古き草紙物語などに見えたり。絵書きは，絵をかく事なり。花結びとは，物の緒をあげまき・あわび結びその外，色々，様々，花やかなる結びかたを習い覚えたるをいうなり。これも一つの芸なり」と説明する [1]。ここでの花結びの定義は，女性がするものであり，総角結びや淡路結びも含め，花やかな結び方を指し，植物の花の形状の結びのみを花結びと定義していないことがわかる。花結びという言葉における「花」は，花やかな情感を想起するモチーフを指す言葉と解釈でき，本研究では同解釈に依拠して論を進める。

花結びに関連する先行研究に関しては，額田巌（1911–1993）および藤原覚一（1895– 没年不明）によって結び研究が行われてきた。両名が膨大な数の結び方を分類し，結びについて大胆かつ包括的な歴史観を提示し，学問分野に位置付けた貢献は大きい。一方，その著述には典拠がなく，内容の真偽を再検証する必要がある記述も少なくない。また，両名の先行研究を踏まえて仕覆に伴う結びについて論考を発表した仕覆作家・研究者の柳順子の研究については，学術研究に援用するには再検証が必要な部分がある。したがって，これまでの先行研究で示された結びに関する文献に加えて，古事類苑および国書総目録等を手掛かりに集めた史料をあわせて分析対象とした。これまでの筆者の史料考察では，花結びの記録が図絵として認識できる史料は宝暦年間まで見られなかった。その一方で，それ以前にも結びに関する記録は正倉院宝物，名物記，茶会記，辞書類等の一次史料に見ることができる。そのため，本研究では，花結びが図絵として記録される以前の史料を概観し，その後に，図絵として視覚的に記録された花結びに関する史料を考察する。

まず，考察を行う際の主な観点について述べる。（1）花結びがどのように享受され，花結びに関する視覚的記録が残るに至ったのか。（2）結びで作られた形が表象物としてどのような意味をもつのか。（3）複雑な形状をした有機体である植物を簡素化，単純化し，紐で線的表現をするにふさわしいモチーフはどの様な花であったのか。

史料分析

最初に，図絵としての花結びの記録以前の袋物に結ばれた結びに関する史料として，正倉院所蔵の『小香袋』，『源平盛衰記』，『君台観左右帳記』，『茶器名物図彙』，『山上宗二記』，『日葡辞書』，『人

倫訓蒙図彙』について概観し，その次に，江戸中期以降に見る図絵として記録された花結びの史料として，『白露結書』，『雅遊漫録』『三斎公御茶書』，『古流結法図』，『香道調度図』，『包結記』，『玉のあそび』，『志野袋』について概観する。その上で，袋物に伴った結びや花結びにどの様な意味が内在していたのかについて考察する。

以上の観点に沿って行った考察の概要を以下にまとめる。正倉院宝物や 16 世紀の史料から，貴重品であった唐物の茶道具には袋が伴い，そこに結びが施され，袋や結びには，貴重な唐物を表象する役割が内在し得た理由を提示した。唐物の表象に加えて，江戸時代中期には，師匠から弟子へと秘儀の知識を伝えた際に花結びが用いられる様になり，その背景には，茶道や香道で見られた家元制度の確立時期と呼応した変化であったことを本研究は示した。知識の伝播という面からは，江戸時代後期に木版印刷が普及するまで，花結びに関する記録は写本として残されることが多く，その内容は限られた人たちの間で共有されてきた。一方，江戸時代後期には『玉のあそび』に見られる様に，木版印刷された書籍は大衆に知識として取り込まれ，花結びに関する知識は秘するものではなくなった。さらに，茶入れや食籠等に花結びが封印として用いられていたことも示し，多様な目的で花結びが用いられていたことを指摘した。また，時代を経るにつれ，花結び種類が増えていった様子も明らかになった。

茶道および香道で用いられる花と花結びの関係

次に，茶道および香道で用いられる花と花結びに用いられる「花」のと比較を行い，その関係性について考察する。茶道で用いられる花については，茶の湯の流行により茶室の花が生まれ，江戸時代には「茶の花」も確立された。茶の花として，大切にされる価値観は第一に色であるとこれまでの先行研究が示す。白い花を評価し，赤い花を嫌う。その為，炉には白い椿が，風炉には白い木槿が代表的な植物として認識されている。また，牡丹に関しては，赤い牡丹は忌避されたが，紫の牡丹を飾ることはよしとされた。一方，禁花とされた，香の強い花，悪臭のする花，毒々しい色彩の花，トゲのある植物，食用の花，季節感のない花に関しても，江戸時代の花結びのモチーフになったものを今のところは確認していない。香道で用いる花については，香席には原則として花を生けないが，その代わりに造花を飾る場合があり，そこで挿枝袋を飾る。興味深いこととして，月ごとに決まった挿枝袋のモチーフの花と同じく月ごとに決まった結びを結ぶ志野袋のモチーフの花が完全には重ならないことを指摘できる。4 月の挿枝袋は牡丹であるのに対し，志野袋は葵，6 月の挿枝袋は百合であるのに対し，志野袋は蓮，12 月の挿枝袋は椿であるのに対し，志野袋は雪持笹である。挿枝袋で用いられる牡丹，百合，椿が結びに適さない理由があるとすれば，一筆書きが難しく，一本の紐で表すことが難しい花弁が多いモチーフであることも関係し得るといえる。また，香道における禁花とされる花々もこれまでのところ江戸時代の花結びのモチーフとして確認していない。

おわりに

本研究では，史料にもとづき，花結びが一種の記号として担ってきた意味の変化を明らかにした。また，茶道・香道において発展した花結びにおいて，花結び独特の志向がみとめられることも確認した。それは例えば，茶道において実際に好んで生けられた，白い椿や木槿のような花が，花結びのモチーフには採用されていない点や，香道で用いられる志野袋の結びにおいて一本の紐で意匠を表すことが容易な花卉が採用された点から窺える。

註

1　伊勢貞丈『貞丈雑記　四巻 東洋文庫 453』平凡社（1986），p.223.